

「銀の匙」本文調査

堀 部 功 夫

はじめに

久保田正文は、△夏目漱石の推薦で『銀の匙』が「朝日新聞」に連載されたのは大正二年であることはほぼあやまりないところであるが、現在の形のものとどのように異なるかは明らかでない。

『夏目先生と私』と、「先生の手紙と『銀の匙』の前後」とをあわせよんでみると、漱石がこの作品をよんだのも大正二年ころではないかとうたがわせるフシもある。和辻哲郎の岩波文庫版『銀の匙』解説も、いっばんの文学史辞典なども、このあたりの説明は明確を欠いている。▽と記した。⁽¹⁾

「銀の匙」初出年月日については、右文以前すでに『現代日本小説大系』17巻p.313・341に「ただし前編開始日・後編完結日の日付は誤」、および熊坂敦子が△「前編」は大正二年四月八日から六月四日

まで五七章、「後編」は題名「つむじまがり」として大正四年四月一七日から六月二日まで四七章『東京朝日新聞』に連載された▽ことを報告しており解明済みである。⁽²⁾

しかし、その初出本文が△現在の形のものとどのように異なるか▽は未だ十分には△明らかでない▽。本文異同にふれる先学の業績として、熊坂敦子・飯山⁽³⁾〔現姓藤山〕⁽⁴⁾真代のよき成果がある。その労苦を察しながらも、私の調査と照合すると先人が未提示のものもあり、発表を中止しないこととした。やはり管見を記録して、作品の読みに備えておきたいと思ったのである。

とりあえず、引用させていただく先学の諸論考、生島遼一氏〔先生の照会に対し昭和58年4月29日付手紙で報告したのが小稿の骨子となった〕、中和氏・嶋田豊子氏〔中家に関する教示〕、藤山真代氏〔論文複写恵投〕、渡辺外喜三郎氏〔「カンナ」誌・『鹿兒島大学文

科報告』抜刷恵投)および岐阜県歴史資料館・神戸市立図書館・堺市立図書館(ともに蔵書利用)各位に深甚なる謝意を表したい。

注

(1) 『日本青春文学名作選』19(昭和40年2月10日、学習研究社)「解説」p.131。

(2) 『鑑賞と研究』現代日本文学講座/小説3(昭和38年1月15日、三省堂)「銀の匙/解題」p.208。

(3) 熊坂は注(2)文獻P.208~216で、初版と岩波文庫旧版とを比べ、回区分の相違と後編八四七Vの削除とを指摘し、文庫旧版前編八七V・後編八六Vについて28箇所の変文を示す。

(4) 「仮綴本『銀の匙』について——『銀の匙』成立に関する美意識」(一)~(四)「刊日未詳」昭和53年2月28日刊『カンナ』85号~89号。初版と岩波文庫新版とを比べ、回区分の相違を指摘し、主に内容上の改訂を論じる。

一 本文

私の見る事ができた「銀の匙」(のちに「銀の匙」補遺とされる「花さか爺」「こまの歌」を除く)本文は、次のとおりであった。

A 初出本文

前編〔題名「銀の匙」、署名「那迦」〕連載に先立つ大正2年4月7日付紙面に作者予告が載っている。これまで注意されたことのない著作なので、再録する。

「銀の匙」本文調査

私が思ひ出を書かうと思ひ立つたのは十六七の時であつたらうか。その後十年程もそれなりになつてゐたのを二三年前ながら病床にゐた間暇にまかせて記して置いた。今度その一部に手をいれて銀の匙と名けこゝへ載せることになつた。己の足跡をとめるといふことはどれ程の事か知らないけれど、私のやうな者にさへこんな小さな皺のない足跡をつけたこともあるかと思へば昔懐しさに堪へられない。

さらに、前編末尾に(明治四十三年春病床にて)と付記する。ただし、これは素材の脱稿時点を示すもので、(その一部に手を入れ)た「銀の匙」脱稿は明治45(大正1年)であるらしい。

後編〔題名「つむじまがり」、署名「那迦」〕連載に先立つ大正4年4月16日付紙面には(曾て本紙に載せたる「銀の匙」の後編)との簡単な紹介しかない。後編に末尾付記なし。

前後編とも漢数字以外総ふりがなである。

B 初版本文

大正11年1月刊か(奥付には(大正十年十二月十日発行)とあるけれども(大正十一年一月十日)付の正誤表が冒頭に綴じ込んであるので)、岩波書店版・著者表示は表紙・背文字に(那珂著)、奥付に(著者中勳助)。四六判、仮綴紙表紙。前編末尾に(大正元年)と、後編末尾に(大正二年)とそれぞれ付記する。後者につい

て、「私の処女作と自信作」の記述と一致するとはいえ、それ以前
のつまり執筆により近い時期の記述とは一年くらいちがいを生じる。
△二年▽は△三年▽の誤記かと思うが、推敲・整理・浄書をくりか
えず作者のことだから、しばらく断言しないでおく。

なお、初版本の復刻が昭和44年4月10日・日本近代文学館より出
ている。よく出来た復刻であるけれども、底本（岩波書店所蔵の一
本）の書き込みと推定される文字まで「復刻」されているので要注
意。p. 67 l. 1 △環の真中▽、p. 67 l. 3 △蓮華の花▽、p. 70 l. 6 △よ
く見よう▽、p. 124 l. 14 △から出て▽の各傍点字である。

C 改訂版本文

小稿という改訂版とは一般にむしろ初版とよばれている大正15年
4月10日刊、岩波書店版をさす。著者表示は奥付に△著者中勘助▽。
四六判、函入。前編末尾に△大正元年初稿▽、後編末尾に△大正二
年初稿▽と付記する。

この時すでに著作を実名で発表するようになっていたため、著者
表示から△那迦▽・△那珂▽が消える。と同時に本文中△己が名▽
の△俊坊▽あるいは△しゅんぼん▽等を△□ぼう▽・△□ぼん▽と
改める。自分を△俊▽某と仮名であらわしていたのを、勘助と読ま
れうる（実際改訂版△□ぼう▽を勘坊と読む人の例は、中他の著作
「闘球盤」・「水尾叔暁師と三千院」にみえる）ように修正している。

この度の推敲は大正14年の△夏のはじめ▽になされたらしい。
「しづかな流」大正15年1月9日の条参照。
なお、1983年6月3日、改装復刻Ⅱ△第二刷▽が、巻末に△初出一
覧▽を付して刊行された。

D 岩波文庫旧版本文

小稿という旧版とは、昭和10年11月30日刊第1刷以降、37年11月
16日刊第36刷以前の分をさす（このうち第1・3・8・10・12・15
・19・20・26・27・32刷のみ卒見）。第37刷以降分は次記全集本文
を△底本として▽いるので後述する。

各編末尾付記は改訂版と同じ。巻末の和辻哲郎「解説」が前編を
△明治四十四年の夏▽執筆とするてんは、渡辺外喜三郎「漱石と勘
助と三重吉」〔昭和32年9月1日刊『国語と国文学』〕が指摘するよ
うに、作者自身の記述と一年齟齬する。中が明治44年にも野尻へ行
っていることに起因する和辻の錯誤ではなかるうか。

ところで、文庫本は昭和23年9月1日刊第13刷時に△改版▽した
ようである。△改版▽によりハシラが無くなり、誤植が生滅し

		第1～12刷	第13～36刷
p. 113 l. 10	怒つて	怒つて	恐つて
p. 114 l. 2	怒つて	怒つて	恐つて
p. 176 l. 13	きざじ	きざじ	きざし

となつたのを除けば、本文上の異同には未だ気が付かない。その他、第1〜12刷中で、象眼訂正があつたとみられるけれども、今は文庫旧版本文と一括称しておく。

E 全集本文

昭和35年12月5日刊、角川書店版『中勘助全集第一巻』所収〔p. 5〜182〕。各編末尾付記は改訂版と同じ。p. 416に「あとがき」がある。

この度の△校正▽は昭和33年5月頃になされたらしい。昭和33年5月19日付・小宮豊隆宛手紙⇨渡辺外喜三郎「中勘助（二十五）」〔昭和57年9月30日刊『鹿兒島大学文科報告』〕参照。

注

(1) 「漱石先生と私」〔のち「夏目先生と私」と改題〕・「先生の手紙と「銀の匙」の前後」などの記事を整理して、前編成立略過程を示してみると、次のとおり。

33	回想執筆を思い立つ。
明治・年頃	
34	
42年	11月、病床。この間に作品の素材を書きためておく。
明治	
43年	5月頃、
明治45年	4月7日、兄の同僚の先生の勧告に従い、執筆によって収入を得ることとした。
〃	夏前か、友人を通じ、漱石が原稿を見る約束、成る。
〃	夏、福岡市九大病院内、妹の枕べで作品の書き起しの部分を書く。

「銀の匙」本文調査

〃 夏、長野県上水郡信濃尻村野尻・石田津右衛門方の二階で、作品を書きつく。

大正1年 〃 9月頃、脱稿。隣村相原の郵便局から漱石宛発送。10月15日、漱石、「銀の匙」稿を読み終わって、賞讀し、原稿をあげる。

大正2年 〃 2月26日、漱石、東京朝日新聞社員・山本松之助に宛て掲載願の手紙を書く。

後編成立に関しては

大正3年 夏、比叡山横川の恵心堂で、前編残りの整理・執筆。10月、原稿を漱石宛発送。17日、漱石、受取る。25・26日、漱石、閲読。

の略経過が知られる。

(2) 『現代日本文学全集』月報51 p. 2に改訂版の書影が△初版本▽との説明付で掲載されているほか、現在も古書肆の目録に散見する。

(3) 「銀の匙」明治44年作と記すものは、〔*印は管見本後刷〕

○『日本の名著』〔昭26・5・5、毎日新聞社〕の無署名〔壇谷雄高か〕「銀の匙」 p. 186。

○『現代日本小説大系17』〔昭26・11・15、河出書房〕の伊藤整「解説」 p. 380。

○矢端乙美「近代文学への反省」〔昭27・7・10「上毛国語」〕 p. 36。

○『日本詩人全集4』〔昭27・10・10、創元社〕の無署名略伝 p. 192。

○『現代文学総説2』〔昭27・10・25、学燈社〕の杉森久英「隨筆文学」 p. 251。

○『世界少年少女文学全集30』〔昭28・9・1、創元社〕の坪田譲治「解説」 p. 381。

「銀の匙」本文調査

- 『中勘助自選隨筆集(上)(下)』〔昭28・11・20、昭29・1・30、創元社〕の「著者紹介」p.2。
- 『縮約日本文学大辞典』〔昭30・1・20、新潮社〕の「中勘助」p.74。
- 樋田満文『文学東京案内』〔昭31・3・20、緑地社〕p.155。
- 『現代日本文学全集75』〔昭31・6・25、筑摩書房〕の河盛好感「解説」p.405。
- 『中学生文学全集17』〔昭32・6・30、新紀元社〕p.25。
- 『現代国民文学全集14』〔昭32・12・15、角川書店〕の山本健吉「解説」p.385。
- 『日本文学鑑賞辞典近代編』〔昭35・6・30*、東京堂〕の熊坂敦子「銀の匙」p.208。
- 村山古郷「中勘助の俳句」〔昭35・8・1、『鶴』〕p.24。
- 『名作の研究事典』〔昭37・7・10、小峰書店〕p.411。
- 久保田正文の前記「解説」p.131、133。
- 『児童文学への招待』〔昭40・7・5、南北社〕p.437。
- 『JAPAN QUARTERLY XX3』〔1973、朝日新聞社〕p.307。
- 樋田満文『東京文学地名辞典』〔昭53・2・25、東京堂〕p.100。
- 阿部猛『近代詩の敗北』〔昭55・2・5、大原新生社〕p.90。

(4) 第3刷本文中、次の欠字・印刷不明箇所がある。

p.75 l.1	第1刷	き ら ひ で
p.76 l.8		け れ ば
p.85 l.1		さ う に
	第3刷	き ら ひ
		さ け に

p.101 l.1	こ	る	こ	ら	と
p.101 l.1	ち	ら	も	と	
p.120 l.14	お	は	ち	も	
p.159 l.10	め	だ	か	か	
p.182 l.11	く	ら	さ	は	
p.204 l.10	そ	こ	に	は	
	そ	く	め	お	こ
	こ	ら		ち	こ
	に	さ	か	ち	ら

二回の区分

これらはその後「管見第8刷では」訂正されている。

初出の各回ごとの掲載月日を示し、初版・改訂版以後とは回の区分に異なるのでそれらを一覧する。すなわち、初出の回と掲載月日、各段落頭〔*印を付す場合は段落途中〕10字およびそれ以下の段落数〔(1)は一段落未滿〕、対応する初版・改訂版以後のそれぞれの回〔×は該当段落なし、点線交又は段落の逆順〕を表示する。たとえば、初出が4月8日の△-▽の後半△私の生れる時には▽以下2段落は、初版でも△-▽内だが、改訂版以後△-▽となることを示す。

掲載月日	初出の回	段落頭10字	それ以下の段落数	初版の回数	改訂版の回数
4月8日	一	わたしの書齋の色々な、が私の生れる時には母は	2	2	一
前編〔大正2年〕					二

18日	17日	16日	15日	14日	13日	12日	11日	10日	9日							
十一	十	九	八	七	六	五	四	三	二							
古い家 <small>ふるい いへ</small> に借住 <small>かりすま</small> ひをして	この辺 <small>へん</small> の人達 <small>ひとたち</small> は皆杉垣 <small>みなすずかき</small>	病身者 <small>びんしんもの</small> の私 <small>わたし</small> は始 <small>はじ</small> 終 <small>しま</small> お医 <small>い</small>	私 <small>わたし</small> はその時分 <small>じぶん</small> から三日	山王様 <small>さんおうさま</small> のお祭 <small>まつり</small> にいゝ山	伯母さん <small>おばさま</small> は時々二人 <small>ときどきふたり</small> の	明神様 <small>みんじんさま</small> のお祭 <small>まつ</small> りの時は	その頃土地 <small>ころとち</small> の風習 <small>ふうじゆ</small> にし	私 <small>わたし</small> の様な者 <small>やうなもの</small> が神田 <small>かんだ</small> のま	気 <small>き</small> にいつた見世物 <small>みせもの</small> の一	ある人 <small>ひと</small> のゐない朝 <small>あさ</small> のこ	お稲荷さん <small>お稲荷さん</small> へ行 <small>い</small> かない	一番気 <small>いちばんき</small> にいりの処 <small>ところ</small> は今	私 <small>わたし</small> は家 <small>うち</small> の中 <small>なか</small> はともかく	私 <small>わたし</small> の生 <small>う</small> れたのは神田 <small>かんだ</small> の	おばさん <small>おばさん</small> はまた私 <small>わたし</small> の病	叔母さん <small>お叔母さん</small> のつれあひは
2	3	2 1	1 4	1 1	1	2 1	1 1	1 2 1 1	3							
十一	十	九	× 八	× 七	六	五	四	三	二							
×	十一	+	×	×	×	九	八	七	六	五	四	×	三			

「銀の匙」本文調査

26日	25日	24日	23日	22日	21日	20日	19日										
十九	十八	十七	十六	十五	十四	十三	十三										
私 <small>わたし</small> の家 <small>うち</small> はお寺 <small>てら</small> の藪 <small>やぶ</small> から	雪 <small>ゆき</small> の夜 <small>よ</small> には伯母さん <small>おばさま</small> は	また、仏性 <small>ぶつじやう</small> の伯母さん <small>おばさま</small>	* 話 <small>わ</small> の中 <small>なか</small> にも稚 <small>こ</small> な心 <small>こころ</small> の悲 <small>かな</small>	私 <small>わたし</small> があかりの暗 <small>くら</small> いのを	* そのそばに玩具 <small>おもちゃ</small> をぶち	構 <small>かま</small> へ内の小家 <small>こいへ</small> へは出入 <small>でいり</small>	夏 <small>なつ</small> になると様々 <small>さまざま</small> の形 <small>かたち</small> し	庄屋 <small>はらや</small> の鉄砲 <small>てつぱう</small> をして伯母 <small>おばさま</small>	伯母さん <small>おばさま</small> は木 <small>き</small> の実 <small>み</small> どち	その頃△△さんといふ	伯母さん <small>おばさま</small> は木 <small>き</small> の実 <small>み</small> どち	運動不足 <small>うんどうふそく</small> のうへ生 <small>う</small> れつ	冬 <small>ふゆ</small> のはじめのことであ	筋向 <small>すぢむか</small> ふの風見 <small>かぜみ</small> の駕籠 <small>かまどろ</small> は	この辺 <small>へん</small> には木権 <small>きごん</small> を多く	また折々 <small>せつせつ</small> 近所 <small>きんじよ</small> の大日様 <small>おほひ</small>	少しばかりの茶煙 <small>ちやえん</small> を聞 <small>き</small>
2	2	3	(1) (1)	(1) (1)	1 3	1 1	2 1 1	1 2	1								
十九	十八	十七	十六	十五	十四	十三	十二										
×	十九	十八	十七	×	×	十六	十五	十四	×	十三	十二						

8日 三十	7日 二十九	6日 二十八	5日 二十七		4日 二十六	3日 二十五	2日 二十四	1日 二十三		29日 二十二	28日 二十一		27日 二十			
やはり此辺に住んで百	二人ともうつし絵が大	お国さんの櫛は赤く塗	お国さんとはいつとは お国さんの家もよその お国さんは子供同士が		こちらへ越して来てか	臆病者の私は人中では	夜店の中に酸漿屋は心	夜店を一顧見まはつて 少し早く行けば見世物		涅槃会の日には古い燻 月三さいの大日様の縁		畑のぐるりの杉垣のそ ぢぎ近くに閻魔様のお 仏生会の日に大日様で		或時いつしよに海老を 三四十坪ほどの裏のあ		
4	6	2	3	1	1	2	3	4	1	1	2	1	1	1	2	1
三十	二十九	二十八	二十七		二十六	二十五	二十四	二十三	×		二十一		二十			
三十	二十九	二十八	二十七	×	二十七	二十六	二十五	二十四	二十三	×	二十二	二十一	×	二十一	二十	×

20日 四十二	19日 四十一		18日 四十	17日 三十九	16日 三十八	15日 三十七	14日 三十六	13日 三十五	12日 三十四	11日 三十三	10日 三十二	9日 三十一	
不勉強の報いは顔面に	海岸の旅から帰つたら		朝は早く起きてまだ明 或日父といつしよに深	それは雪の中に路に迷	便所は教場からはなれ	岩橋の本は赤鉛筆でめ	幾日かの後には学校の	先にはいつた子達はも	いよ／＼といふ日が来	お国さんは小さいのや	棟梁の辰さんにはお仙	あの静かな子供の日の	
1	1	3	1	1	1	1	2	2	1	2	2	3	3
四十二	四十一		四十	三十九	三十八	三十七	三十六	三十五	三十四	三十三	三十二	三十一	
四十一	四十	三十九	×	三十九	三十八	三十七	三十六	三十五	三十四	三十三	×	三十一	

「銀の匙」本文調査

30日 五十二	29日 五十一	28日 五十	27日 四十九	26日 四十八	25日 四十七	24日 四十六	23日 四十五	22日 四十四	21日 四十三
其ころ西隣へ縫箔をす	冬の夜の遊びには楽しんで 毎日鈴のついたぼつく	男の組がすんで今度は毎日 或日のこと修身のお話	学校がひけてからお葱 或時麻疹のため幾日か	お葱ちゃんのとこでは お葱ちゃんは裏口から お葱ちゃんは狡猾にも	お葱ちゃんはその隣のお嬢様 お葱ちゃんの耳たぶは	二人は学校から帰れば お葱ちゃんとお増しに	海岸の旅から後私には お葱ちゃんとお増しに	お国さんと遊んだ頃の	その学期も終りに近づ
1 3	2 1	1 2	1 2	3 1	1	3	4	2	1
五十二	五十一	五十	四十九	四十八	四十七	四十六	四十五	四十四	四十三
四十九	四十八	四十七	四十六	×	四十五	五十	×	四十五	四十四

23日	22日	21日	20日	19日	18日	17日	4月	4日	3日	2日	1日	6月	31日
七	六	五	四	三	二	一	後編(大正4年)	五十七	五十六	五十五	五十四	五十三	五十三
どろ／＼のわる臭い堀	朝の習字の時間であつ 兄はその年ごろの者が	私は蟹本さんの機嫌の 地球には引力といふも	同級の生徒はどれもこ 私はより以上の反感と	私にとつて更に不仕合 そんなにして根ほり葉	中沢先生は気のやさし	お節句が過ぎて間もな	垂氷を折り堅炭で雪を	このきたない大将の負	奸智にたけた富公は自	気も狂ひさうな日が幾	富公のそこは裏では極	富公は近処に友達がな	
1	1 1	2 1	3	4	2 1	2	2	2	2 1	1	1 1	1	
七	六	五	四	三	二	一	五十七	五十六	五十五	五十四	五十三	五十三	
四	×	×	三	二	一	五十三	五十二	五十一	五十	×			

「銀の匙」本文調査

4日	3日	2日	15月	30日	29日	28日	27日	26日	25日	24日		
十八	十七	十六	十五	十四	十三	十二	十一	十	九	八		
私が六つの年の正月の……小さい胸の思ひのこのころはもはや唯恍	ある日私は米櫃の上に一つは境遇から、一つ	その蚕種が孵つた時に私はいろ／＼なことが	姉は手拭をかぶり、前	孟蘭盆会が近づけば伯家のぐるりには切り残	そこは網を貸したり釣	兄は随分熱心に綿密に	*それを興あることに見	また他の一群の漁師は	岩がちの岬の根もとに	家が狭いので私達はそ	ある時これも教育とい	
1 1 3	1 2	1 2	2	1 2	8	2 1	(1) 1 + (1)	2	1	3		
十九	×	十八	十七	十六	十五	十四	十三	十二	十一	十	九	八
×	×	九	×	×	八	×	七	×	六	×	六	五

13日	12日	11日	10日	9日	8日	7日	6日	5日							
二十七	二十六	二十五	二十四	二十三	二十二	二十一	二十	十九							
流石の異人さんも持て	少林寺の筋向ふの洋館	私は眼瞼をふるはせな	地上の花を暖かい夢に	夏のはじめの頃にはこ	一番采みなのは栗の盛	恐ろしいのは鳶頭の息	夏は毎日蟬とりに憂き	春の頃には坂一つ向ふ	寺は重に旗本を檀家に	ある夜ふと人に誘はれ	「先生、人はなぜ孝し	私は皆が目のふちを赤	その次に私はその祖母	私の何より嫌ひな学科	私は学校へあがつてか
1	2	2	1 1	1 1 3	2 1	1 2	2 4	1 1 1 1							
二十七	二十六	二十五	二十四	二十三	二十二	二十一	二十	十九	×	×	×	×	×	×	×
×	×	十五	十四	十三	×	十三	十二	十一	十	×	×	×	×	×	×

25日 三十九	24日 三十八	23日 三十七	22日 三十六	21日 三十五	20日 三十四	19日 三十三	18日 三十二	17日 三十一	16日 三十	15日 二十九	14日 二十八
ばあやは三十ばかりのばあやは大切に紫の風	その土地でばあやは不爺さんは若い時子供	十七の年の夏を私は一	その頃まつ黒な小犬を	伯母さんは後でさはり	伯母さんは古ぼけた行	案内もなく人の庭先ま	私は中学へはいり貞ちいゝ道連れのあつたの	私は判りきつた貸家札	晩がた異人さんのとこ	ある時貞ちやんが△△	異人さんは手すりに腰
1 1	1 1 1	2	2	2	1	2	2 1	2	4	1 1	3 1
三十九	二十八	三十七	三十六	三十五	三十四	三十三	三十二	三十一	三十	二十九	二十八
十八	×	十八	×	十八	×	十七	十六	十五	×	×	×

26日 四十	27日 四十一	28日 四十二	29日 四十三	30日 四十四	31日 四十五	1日 四十六	2日 四十七
彼がこのやうに隔てな夕がた湯からあがつて	旧盆の夜ばあやにすゝある日の午後私は後の	この峰は海に向つて開	私はいつものとほり裏	私はそこを木霊の峰と	私はほつと息をつくとそれから私は何故か出	その翌日読み終つた新	その夜姉様はいつにな
2 1	1 1	1 1	1 1	2 1	3	4	4
四十	四十一	四十二	四十三	四十四	四十五	四十六	四十七
×	×	十九	二十	二十一	二十二	×	×

三 初出から初版へ

初出と初版の異同は、第一に回の区分であり(前記)、第二に誤植の訂正であり、「省略」、第三に表記上の、第四に内容上の、改訂である。

第三・表記上の改訂についていえば、

一 ふりがなの廃止

二 用語用上

(一) △江(の草体)▽を廃して△え・△ゑ▽にかえる。

(二) 漢字の字体を好みものに統一する。

たとえば

△顎▽↓△脰▽⁽¹⁾

(三) 送りがなをつける。

三 読点の加減

の傾向である。

第四・内容上の改訂についていえば、煩瑣箇所削除が主である。

削除段落は次の五箇所であった。

① △毘沙門様の縁日▽を描くくだり(前七)。

② △その外神田にゐた時の思ひ出▽を羅列する(前八)。

③ △大日様▽縁日の婆さん△乞食▽に施す(前二十三)。

④ △死なうかしらと思ふ▽ときがあった(後十八)。

⑤ そのとき△走馬燈のやうに駆けめぐる▽回想を列挙する(後十

九)。

の各段落である。このうちもつとも長文の③を例にとる。例文の

直前が△縁日には大勢の乞食が出てお寺の塀ぎはにつらりとなら

ぶ▽さまを綴った28行からなる一段落であることを前提に読まれた

い。

夜店を一顧見まはつて帰る頃には大日様の門前に大勢の乞食がならんである。こゝにあるのは乞食の中でも芸ましの穢いばかりでぼろ三味線をべんべこべんべこ弾たり子供とあんべらの上に坐つて唄みたいにどうぞやどうぞをいつたりしてゐる。

その中に背の曲つて萎びかへつた婆さんがお寺の門ぎははみんなほかの乞食に場をとられて人通りのない原のそばの溝ぼたに消江くのかんてらをも一つ立て、前には二三枚のつけ木を置いて風に飛ばされぬ様石ころをのせ、三味線も子供もなしに黙つてうつむいてるのがあつた。夜がふけて露店のあき人ども店をしまひ仲間の乞食も帰つて人通の絶江の頃迄もさうしてうつむいてゐる。寒風の吹く冬の夜などそれを見れば折角浮き立つた氣もめいつてしまひ少林寺の藪と原との間の長い坂路をそのことばかり考へながら帰つてくる。私はその婆さんに施さないこととはなかつた。

この段落が削除されたのは、前接段落と類同の内容のためくたくだしくなるので整理されたものとみられる。作者は「漱石先生と私」において、「△銀の匙」が出た時分のこと先生はその縁日のことを書いたところに、あまりくどく同じ様なことがくり返してあるといふことを非難した。私はよくも覚えてゐなかつたゝめか、さういふこ

とがあまり問題にならなかつたためかなにかで、唯きよ流しにして
 おいた。その後先生はまたそのことを注意した。私はまたきよ流し
 ておいた。それからある時ふと思ひ出してそこを読みかへしてみた。
 そして先生の非難が当つてゐると思つた。先生は私がいつもきよ流
 しにするので、私がまだ気がつかずにゐると思つたのか、この時も
 またそのことをいひ出さうとした。私は先生が二言三言いひかけた
 時に「あ、あれは別りました。」といつた。先生はすぐに「あ、さう
 か。」といつてその話をやめてしまつた。こんなところが大変よかつ
 た。√と述べていた。このてんからも右の改訂事情を想定できよう。
 なお、初版本に付された「正誤表」⁽²⁾においては、誤植訂正のほか、
 次の改訂もなされている。

○接続助詞△て√を付加する傾向

たとえば

△取出し√△取出して√

○文章を区切って短くする傾向

たとえば

△のいたのを、√△のいた。√

などである。

注

(一) 河盛好蔵中が△顎という字の代りに、鴈いつも書いているのも、

「銀の匙」本文調査

作者の好みの強さを語っている√と、既掲『現代日本文学全集75』の「解
 説」で指摘していた。△鴈といふも書√くのは初版以後でこのような好
 みによる漢字の書きかへは次項に述べる改訂版時に多い。

(2) 紀田順一郎はこの正誤表が△本文中の誤植についてではなく、新聞
 連載当時と単行本上梓にあつたの相違を列挙したもの√であると、昭
 和40年8月7日付『図書新聞』のコラムで解説しているけれども、その
 事実はなく誤である。

四 初版から改訂版へ

初版から改訂版に至るあいだになされた推敲箇所は全ページ・ほと
 んど全文におよび、質量とも最大の改訂であつた。こころみに前
 編一の第一段落を取上げ、その推敲箇所を数えれば

初出から初版へ	ルビ廃止は いま無視する	13箇所
初版から改訂版へ		48 "
改訂版から岩波文庫旧版へ		3 "
岩波文庫旧版から全集へ		9 "

であり、そのことがよくわかる。

初版と改訂版の異同は、やはり、回の区分、正誤、表記上の改訂、
 内容上の改訂にまとめられる。

表記上の改訂をみよう。

一 用字

(一)漢字を適宜かなにかえる。代名詞・形式名詞の大概はかなにかえる。

いきおい、かなの使用が増加する。これまた前編一の第一段落で、かなと漢字とを数えると

	かなの数	漢字の数	かな使用率
初出	269	118	約69%
初訂版	274	117	約70%
改訂版	339	80	約81%
岩波文庫旧版	339	80	約81%
全集	333	80	約81%

で従前より白っぽい字面になった。

(二)別体の漢字にかえる。

たとえば

〈着〉↓〈著〉

作者は「漱石先生と私」において、「銀の匙」原稿を読んだ漱石が〈仮名を「めちや〜」に沢山使ふことを非難した。それは事実であった。仮名を多く使ふことについては、一つは私の或主義から一つは漢字に好悪があるので嫌な漢字を出来るだけ使はない為にさうするのであつたが、私はその時格別そんな弁明はしなかつた。〉と述べ、初版「正誤表」前書においても、△「銀の匙」は約十年前

ある新聞に前後二回に分載したものであるが、送り仮名法や句読法の選択——前者に関しては私が最初仮名を用ひたのをその原稿について御厄介になつた夏目先生の意向を尊重して漢字に書きかへたところが沢山ある——のかへたいのが無数にある。それは今愈書物にして出すとなればやはり自分の流儀にしたくもあり、また十年前と今日とは私自身多少考へや好みがちがつてゐるからでもある。と記しながら、もちこしていたのである。このため、改訂版を機に、かなを多く用いたり、好みの字体の漢字に直したりしたのにちがいない。

二 用語

(一)同語の反復を避ける。

たとえば

〈小箱がしまつてある。箱は〉↓〈小箱がしまつてある。それ

は〉

(二)稚気を帯びた語も交え生き生きした表現をめざす。

たとえば

〈一つの方〉↓〈かたつぼ〉 〈散々〉↓〈さんざ〉

三 文体

(一)口語化

たとえば

△露しらぬこと▽△つひぞ知らないこと▽

(二)文章を区切って短くする。

たとえば

△飛のいたのを▽△飛のいた。▽

用語・文体の改訂では、本文を聴くときの配慮がきわ立つ。今一度引くが「漱石先生と私」に△「草枕」を非常に面白く読んだ。そ

してなんでもその文章、ことに語彙の豊福な点に最も心にひかれた

やうに記憶してゐるが、併し先生が常に、若しくは屢、耳を無視す

ることに對してはいつも不満であつた。▽と記す作者は、さすがに

△耳▽を重視する人であつた。

四 記号

(一)くりかえし符号をやめる。

たとえば

△色々な▽△いろいろな▽

(二)読点を加える。

これも前編一の第一段落でみると、

初				
出	3	7	337	
	読点の数	句点の数	総字数	句読点間の平均字数
				39

「銀の匙」本文調査

全	改訂	初	
岩波文庫旧版集	新版	版	版
8	11	11	3
7	7	7	7
413	419	419	391
28	23	23	39

で、読むときも見た目も易しくなった。

(三)間をとるところを一字あきとする。

たとえば

△蓋をする時ばんと▽△蓋をするとき ばん と▽

いかにも字面や口調に注意する作者らしい改訂といえよう。

次に、内容上の改訂をみよう。削除段落「○印で示す、()印はそ

れに準じる長文の削除である」が60箇所を超える。すなわち――

①病身をなおすため水天宮の御符を伯母さんと一緒に吞む(前三)。

②父につれられ山王祭に行き機嫌を悪くした私は栄太楼の梅干です

かされる。③ばいごまの思ひ出。④蝙蝠追いの回想。⑤同邸内の車

夫の兼さんから鮑を貰い大事にする(前八)。

⑥恐ろしい夢をうなされて泣く(前九)。

⑦末の妹が生まれ可愛がってやろうと意気ごみ大好きの栗とい名う

前を提案して皆に笑われしよげる。⑧草地で遊ぶ(前十一)。

⑨まわる風見鳥・匂う芋虫(前十三)。

⑩伯母さんと庄屋の鉄砲で遊ぶ(前十五)。

- (11) 父が子供達に維新当時の困窮生活を語る (前十六)。
 (12) 伯母さんによる狐の啼き声の説明。(13) 伯母さんは時々手のつけられない疔癩を起こす (前十九)。
 (14) 海老を買いに行つて腹を立てる伯母さん (前二十)。
 (15) 仏生会の思ひ出 (前二十一)。
 (16) 近所にあつた三本の巨木のこと (前二十七)。
 (17) お仙ちゃんのお母さんも維新時にひどく零落した人だという。(18) ひかえめすぎるお仙ちゃんはいつも仲間はずれにされている。(19) 正月に私は大事の羽子板を持つてお国さんを誘いにゆく (前三十二)。
 (20) 二人の豪華な羽子板をお仙ちゃんが羨ましそうと見とれるから、彼女のみすばらしいのと交換をする。(21) しかし、すぐとりもどすのでお仙ちゃんはしよげてしまふ (前三十三)。
 (22) 早朝の海岸は人がいなくてうれしい (前四十一)。
 (23) 初来家のお蕙ちゃんはたちまちわが家中の可愛がり子となる。
 (24) お蕙ちゃんの両親は肺を病んでいとときく (前四十八)。
 (25) お蕙ちゃんは鶯がほうほけきょうでなく、ひいごじみよと啼くと言ふ。(26) 彼女はまた蟬の啼き声の鳥のそれと言いはる (前四十九)。
 (27) 私はお蕙ちゃんに取り入る富公を嫉妬して燃え立つ思ひだつた (前五十四)。
 (28) 先生の引力説に不得心の私は質問をくり返す。(29) つまつた先生から怒鳴られ、先生も無知と知る (後五)。
 (30) 欺満漢の先生をやりこめる。学校が不愉快でならない (後六)。
 (31) 「小国民」誌を愛読する (後八)。
 (32) 漁師が舟を漕ぎ出してゆく。(33) 地曳網を私は見ていた (後十一)。
 (34) 一人で餌を取る漁師とてであらう (後十二)。
 (35) 孟蘭盆会に迎火をたく。(36) あの伯母さんが亡くなって十三年もとうに過ぎた (後十四)。
 (37) 私が目上の者を憎悪するに至つた、事のはじめは次のとおり (後十六)。
 (38) 私が何心なく見つけた墨のかけを、父は人からの貰い物ときめつけ私を追求した。嘘をつくとかえつてゆるされたこの一件で、目上に対する盲信から醒めた。(39) 八あはれなる人の子よと慨嘆 (後十七)。
 (40) 私が六つの年、祖母が死んだ。(41) わけのわからない私に死は静かに葬儀は楽しいものとみえた (後十九)。
 (42) 桔梗の思ひ出 (後二十三)。
 (43) 近所の洋館へ安逸の宣教師が越して来る。(44) 門前で遊んでいた私と貞ちゃんとは異人さんの奥さんに邸内へ引張り込まれる (後二十六)。
 (45) 通弁の皆川さんが来て、立派な部屋を見せてもらう。(46) 異人さん

の奥さんは気丈な人である(後二十七)。

④ある日、皆川さんに呼ばれてあがったとき、神の救いについてたずねる。⑤私には悲しいことがあると告白した。⑥私は今度のクリスマスに必ず教会へゆくと約束して帰った(後二十八)。

⑦しかしそのまま行けないことになり、それからは異人さんたちに気咎めがした(後二十九)。

⑧言い訳をしたいと思いますと思いうち、異人さんはどこかへ引越して行ってしまう。⑨寂しく心細く残り惜しい気になる。⑩空屋にもどってきた異人さんの飼犬を涙ながらに見送る。⑪私は十三歳で中学へ入ったが、次第に懐疑的になる。⑫動物学の先生が勘違いから私を天才ともちあげた(後三十)。

⑬だが次の試験で零点をとり先生を苦笑させた。⑭私は枇杷に水をやるのを忘れ、枯らしてしまったことがある(後三十一)。

⑮十六の頃、小犬を一匹飼って可愛がっていた。⑯その犬が腫物で醜悪になると、嫌悪の情から追いまくった(後三十六)。

⑰ばあやはつれあいの爺さんを嫌ったけれども逃げ切れなかったという(後三十八)。

⑱ばあや一度死後の美しい路を行き、もどって来たよし。⑲ばあやに灸をすえてもらう(後三十九)。

⑳湯上がり、ばあやのくれた芭蕉の蜜をすう。㉑竹竿でたたくとこ

ぼれる、その蜜(後四十)。

㉒旧盆の夜は鎮守様の村芝居を見にゆく(後四十一)。

㉓姉様と別れ二三日して私も帰ることになる。㉔私は不幸にして生れた。㉕自らの孤独に涙する。㉖：△あはれなる子よ。汝の憧憬は永劫醒めることなく、また充されることもないであらうか。▽(後四十七)。

以上69箇所が削除される。削除部としては、まだこの他に段落未満の小部分が数多くあるけれども、これだけで十分であろう。

これらには、煩瑣箇所の削除ケースもあるが、最も目立つのが登場人物の負的印象にかかわる箇所の削除ケースである。

そのてんをさらに、人物描写・境遇上と便宜的に二分して概観する。

一 削除部・人物描写の負的印象

(一)△私▽の思いやり不足〔17〕〔21〕、△憎悪▽〔37〕〔39〕、△後ろ

暗さ▽〔43〕〔53〕、△懷疑▽〔54〕、△嫌悪▽〔55〕〔59〕

(二)△父▽の虚勢〔38〕

(三)△伯母さん▽の△疝癪▽〔1〕、〔13〕、〔14〕

(四)△お蔥ちゃん▽の△強情▽〔25〕、〔26〕

たとえば、子煩悩の△伯母さん▽が反面△時々病的に手のつけられぬ疝癪を起す▽人であったことは削除部で知られる。△のぼせ▽

症や△死に際にはひどく苦んだ△ことも削除された。△伯母さん△のこれら負的印象は消され、もっぱら△仏性の伯母さん△像が残されたのである。

このてんは、飯山論文⁽¹⁾に指摘済みなので、ここでは重複をさけ△登場人物は善良で明るいという一面性で描かれている。それは、読者に登場人物を印象づけるためにも必要なことであり、作品の美しさの要素でもあるのではないだろうか△という飯山の結語を抄引して先に進もう。

二 削除部・登場人物の境遇上の負的印象

(一)△私△の家族の△みぢめな昔の生活△〔11〕

(二)△お仙ちゃんのお母さん△の零落〔17〕

(三)△お蕙ちゃん△の家庭的不幸〔24〕

(四)△ばあや△の過去〔26〕

これも一部は飯山論文に指摘済みだが、できるだけ補述・新見につとめたい。

たとえば、次の削除部分についてである。

父は声色のすむたんびに

「はゝはあ」

と大気らしい高笑ひをしながら間々に子供達に昔話をしてきかせる。御維新まぎになつて十八の年に父に死なれた時譲り受け

たものといへば箆筒一棹と銭何文とやらにあとは借財であつたといふ話や、廃藩置県後は御多分に漏れずひどく困窮して殿様の方の御用の暇には内職に瓦を売つたり凧の骨を張つたりしたといふことなどで、酒と得意が程よくまはればいつでも其頃伝はつたびひやりどんどんの洋式調練の話をはじめ、陣羽織を着た殿様の前で自分が指揮したといふをかしの和蘭語の号令までやつてきかせた。みぢめな昔の生活の忠実な伴侶であつた母は一も二もなく同感してそばから相槌を打つ。同じ様な境遇を経てしかも無惨な敗北者であつた伯母は昔を思ひ起してしみ／＼と耳を傾け、棟梁は煙にまかれてひたすら感心してゐた。

(p. 40)

この部分をしばらく実話として読んでみる。と、今の△洋式調練の話△から想起されるは、津田左右吉の父の懐旧談である。津田も父から△洋式調練の話の出たことがあるが、それに使はれた術語の一つ二つをきいたくらいであつたと思ふ。△と記す。津田の自伝『おもひだすまゝ』〔昭和24年9月15日刊・岩波書店版〕は、△御一新のところ△同家中の者が△ひどくおちぶれて△いく△運命の下におかれた△ことも記録している。

それも当然、津田の父は中の父と同じ、維新時の竹腰家臣だった。左右吉の父・津田藤馬は△天保十四年九月十四日、今尾藩竹腰氏の

家臣で鉄砲術に長じた親清（俗名幾蔵）の長男として生まれ、嘉永四年家督相続、家禄は四十二俵（尾関公見⁽²⁾）であり、勘助の父・中勘弥は天保13年8月2日、同名勘弥の長男として生まれ（中和氏・嶋田豊子氏の教示による）、明治3年12月・今尾藩庁権大属に任ぜられ、明治4年10月今尾県からの届によれば、元高八百三十石・此現米八三十九石▽・改正高現米八十三石▽（森義一⁽³⁾）であった。ところで、今尾藩家臣群没落譚が、もう一つ、やはり削除部に在る。

棟梁の辰さんにはお仙ちゃんといふおない年の娘があつた。

お仙ちゃんのお母さんとは同藩で私の家などよりははずつと身分のある家の一人娘であつたが、御維新の際散々零落した挙句、ちよつとした間違ひから……する様なことになつたため、家はめもあてられぬ有様になつてしまつたのだといふ。お母さんは心臓が悪くて始終床につきがちであつたけれど、家が裕でないゆゑ病気の養生さへ思ふ様には出来ず、昔のことを思ひ出しては泣いてることがあつたさうである。どうかして気分がいゝ時には家へ来て涙ながら昔話をして行くこともあつた。母も伯母さんも昔を忘れずにお△△様々々と丁寧にとりあつかつて帰つたあとではいつも、昔どこかのお花見の時に△△様のなりの立派だつたこと、世が世ならばお供の女中の二人三人も

つれて歩く人だなどいふ話をしては気の毒がつてゐた。（p. 82. 伏字部Ⅱ初出は△お父様が卒死▽）

これまた津田が同書p. 254? 253に△大名のみぶんを一度はもつてゐた人の末路として、あまり例が無からうと思ふし、明治のはじめの世相を示すものでもある▽、旧主△タツワカさま▽の急没落を伝えたとあつて△ついでに、この人の夫人について聞いてゐることも、こゝに書きそへようかとも思つたが、わたしの記憶にたしかでないところがあるような気もするので、まちがひがあつてはいけないと考へ、さしひかへておく。もしまちがひがないとするならば、それはやはり明治のはじめのころの世相の一面をあらはす話である。▽と慎重な書き方ながら、夫人の零落を暗示している。△お仙ちゃんのお母さん▽も類例であつたにちがいない。

佐幕開国派だつた今尾藩は、維新時大打撃をうけた。いわゆる「青松葉事件」からみで「お国とりつぶし」に近い惨状にさらされたことは、水谷盛光『尾張徳川家明治維新内紛秘史考説』（昭和46年3月1日刊・同氏版）にくわしい。

今尾藩士のなめた辛酸が初出・初版「銀の匙」のそこかしこに反映していたといえよう。問題が拡大するので、いまはただこれを登場人物境遇上暗面の一とし、それがほとんど改訂版で表面から消されてしまったことだけに注意しておく。

これら削除⁽⁴⁾によって、陰影的效果を減じたけれども、作品世界の純度は高められた。

注

- (1) 飯山論文が、初版と改訂版との比較でなく、「後者の再々改訂である全集を底本とした」岩波文庫新版との比較であるてんは厳密といえないけれども、そのことによる大差が無い場合なので、ここにひく。
- (2) 『津田先生のご両親』(昭和40年9月刊『津田左右吉全集第24巻付録』)
- (3) 『平田町史上巻』(昭和39年12月1日、平田町役場) p. 384、386。
- (4) ちなみに、削除部若干は、もっぱら人間の暗部を扱う別の作品に生かされていく。削除段落⁽⁵⁾に写生された「見るも嫌らしい赤裸の犬」が、小説「犬」の「見るもいやらしい姿」の犬像に発展していったように。

五 岩波文庫旧版・全集

改訂版本文を岩波文庫に収めるとき、パラルビを付すなど、作者は手を加えた。

この岩波文庫旧版は「銀の匙」流布に大きな役割を果たした。作者自身、昭和22年11月24日付・渡辺外喜三郎宛書簡(昭和54年9月20日刊『日本近代文学館』51号所収)に「銀の匙は岩波発行のもののうち表紙を朱と緑系統の色に染めつけたもの(小稿でいう改訂版)か岩波文庫本で御覧下さい。それ以前に出た仮綴りのもの(小稿でいう初版)もあります。自分としては今はあまり好みません。」と述べて、改訂版・岩波文庫旧版の定本化にむかった。右文につづけ

て「尤も多少文章がちがふだけで内容にたいした相違はありません。」とあるのを額面通りには受取れないけれども。

その後さらに、凝り性の作者は全集収録にあたりすこし手をいれた。

○助詞「て」「で」に接続し「し」続ける「 ∇ ずっと…する」の意を表す「 \wedge ある」の、 \wedge る ∇ を省略する。

たとえば

「 \wedge はひつてゐた」 ∇ 「 \wedge はひつてた」

○読点をいくぶんか省く。

○用字を本来のものに改める。

たとえば

「 \wedge 一生懸命」 ∇ 「 \wedge 一所懸命」 ∇ 「 \wedge でろれん左衛門」 ∇ 「 \wedge でろれん

祭文」 ∇

○語義を本来のものに改める。

たとえば

賽の河原に石を積む子供の話で「親たちが供養を怠つたために」

「 ∇ 胎内で母親に苦勞をかけたがら恩を報いず死んだため塔をたてて罪の償ひをしよう」と

などである。正誤し、洗練された言葉遣いに直し、美しい口調に変え、「銀の匙」の彫琢はここにつぎ。初出以来実に半世紀近い

年月を閲していた。

これら改訂版以後本文は諸叢書等に収められ広く流布し、「銀の匙」といえば当然、改訂版以後本文のそれを指すに至る。

次にその流布版を一瞥しておく。△印を付すものは抄本である。

発行年月日〔*印は管見本後刷〕、出版社、書名、巻と、抄本の場合の抄出箇所、底本を示す。ほとんどが卒見であるため、底本欄は大雑把な推測である。底本を明記するものはその記述に拠った。あまりに些少の抄出や英訳本で底本を特定しにくいものもある。

発行年・月・日	出版社	書名	巻	抄出箇所	底本
○ 昭26・11・15	河出書房	現代日本小説大系	17	—	文庫旧版
○ 昭31・6・25	筑摩書房	現代日本文学全集	75	—	文庫旧版
△ 1956	Grove Press	Modern Japanese Literature		後十八抄・十九～二十二	改訂版か文庫旧版
Howard Hibbett 訳					
△ 昭32・6・30	新紀元社	中学生文学全集	17	後十六・十七・十八抄	文庫旧版
○ 昭32・12・15	角川書店	現代国民文学全集	14	—	文庫旧版
未見	ポプラ社	新日本少年少女文学全集	26	—	文庫旧版
△ 昭35・12・10	明治書院	人と作品・現代文学講座	5	前十八抄	改訂版か文庫旧版
△ *昭36	講談社	少年少女・日本文学全集	2	前一～四、六～十、十六～四十七、五十二、五十三	文庫旧版
○ *昭37・11・16	岩波書店	岩波文庫〔第37刷改版〕		—	全集
△ 昭38・1・15	三省堂	鑑賞と研究Ⅱ現代日本文学講座	小説3	前十七・十八・後六	文庫旧版
○ 昭38・8・20	新潮社	日本文学全集	23	—	文庫旧版
○ 昭40・2・10	学習研究社	日本青春文学名作選	19	—	文庫旧版
○ 昭42・12・19	講談社	日本現代文学全集	41	—	全集

△	△	○	△	○	○	△
1979・11・21	昭53・12・25	1976	1973	昭46・6・25	昭44・9・5	昭42・12・20
柏書房	北宋社	Chicago Review Press Etsuko Terasaki 訳	JAPAN QUARTERLY	筑摩書房	中央公論社	新紀元社
現代文章宝鑑	物食う女	THE SILVER SPOON	THE SILVER SPOON	現代日本文学大系	日本の文学	中学生のための名作鑑賞
後十	後二十～二十二	改訂版か文庫旧版	前二、三十一～三十四 後四十一抄、四十二、四十八	29	16	後十八抄・十九～二十二
文庫旧版	文庫旧版	文庫旧版	全文庫旧版 改訂版か 文庫旧版	全文庫旧版	全文集	文庫旧版

さて、△岩波文庫に▽△入って▽いる「銀の匙」をとりあげ、鶴見俊輔が△すごくいい本だと思っています。これは、サラッと読み直してみると、きれいなことばかり書いてあるんですね。▽といふように、△きれいな▽世界がこの作の読者をまず魅了するのは異論のないところである。前表の抄本が、子煩悩・博聞強記・純真な伯母さん像の鮮明な部分を取り出していたり、友だちの姉様の部分——阿刀田高が「銀の匙」は△文章の美しさがただごとではない。描かれている世界もまた美しい。後編に登場する友だちのお姉様などは、美しいのなんのって、こういう人は便所になんか行かない、

って思わせるに充分である。▽と絶賛する⁽²⁾、作中とくに美しい箇所の一つ——を引いたりしたものが多いことも、その証しである。しかし、△きれいなことばかり▽の印象が強あまりに、「銀の匙」の世界をただきれいなこととしてすませます読者があるとするならば、それは当たらないことを確認しておきたい。鶴見発言も『銀の匙』をジックリ読み直してみると、必ずしもきれいなことばかりで終わらない”との読みを予定しているわけで、甘美さと表裏の苦味を逸してはなるまい。このてん、先学に言及があり、杉森久英が改訂版以後本文中にもわずかながら残存する厭世的片言に鋭く注

目して⁽³⁾、渡辺外喜三郎が、『銀の匙』の暗面」において、中の幼少年時代を描いた小品に拠って「人間不信の暗黒があの純粋に美しい『銀の匙』の裏がわに√△根強く横たわっている√ことを照し出して⁽⁴⁾した。はやくに小宮豊隆も△中といへば必ず、絹漉のやうなこまやかさで美しいことを書く作家としてのみ通用して、随分損をしてゐるやうに見える。√と書き△中の書くものの美しさは、闇黒の大海から浜辺に打ち上げられた「ますほの小貝」の美しさである。√△ほんとに中の書くものの美しさを理解√するためその奥にあるものを看過しないよう力説して⁽⁵⁾いた。小稿既述の、改訂版で削除された登場人物の負的印象にかかわる異文などは、さしずめその△闇黒√を具体的に示唆する一つとしても見直すことができよう。

- (1) 「子どもの眼」〔昭和51年12月10日刊『文学』〕
 (2) 1983年3月13日付『朝日新聞』日曜版「味読指定席」欄
 (3) 既掲「随筆文学」
 (4) 「中勘助(七)」〔昭和36年8月31日刊『鹿児島大学文科報告』〕
 (5) 既掲『中勘助自選随筆集(七)』の「解説」

おわりに

「銀の匙」は従前、本文問題が軽視されてきたこともあって、小稿を草した。もちろん小稿に遺漏・不備はつきない。

前提となった本文異同表を「前編一の第一段落」例示して結びた⁽⁵⁾い。なお、既述のように初出は総ふりがなであるけれども他はそうではない。この異同はいま除外した。・印は、改訂のあった箇所を示している。漢字字体は現行のものとなっている。

注

初出	初版	初版正誤表	改訂版	岩波文庫旧版	全集
一、 色々な、 がらくた物 入れた 抽匣 昔からの 一つの	前一篇 色々な、 がらくた物 入れた 抽匣 昔からの 一つの		前一篇 いろいろな がらくた物 入れた 抽匣 昔からの 一つの	前一篇 いろいろな がらくた物 入れた 抽匣 昔からの 一つの	前一篇 いろいろな がらくた物 入れた 抽匣 昔から 一つの

箱は
 こるく質
 木で
 合せ目
 毎に
 付た
 あるが、
 はいつてゐた
 何も
 取たてゝ
 ないけれど
 色合の
 柔かいと
 蓋
 時
 ばん
 すると
 為に
 氣にいり
 一つ
 小箱には
 子安貝や

箱は
 こるく質
 木で
 合せ目
 毎に
 付た
 あるが〔一字アキ〕
 はひつてゐた
 何も
 とりたてゝ
 ないけれど、
 色合の
 柔かいこと
 蓋
 時
 ばん
 すること
 為に
 氣にいり
 一つ
 小箱には
 子安貝や

それは
 コルク質
 木で、
 合せめ
 ごとに
 ついた
 あるが、
 はひつてゐた
 なにも
 とりたてて
 ないけれど、
 色合が
 柔いこと、
 蓋
 とき
 〔一字〕ばん〔一字〕アキ
 すること
 ために、
 お氣にいり
 ひとつ
 なかには
 子安貝や、

それは
 コルク質
 木で、
 合せめ
 ごとに
 ついた
 あるが、
 はひつてゐた
 なにも
 とりたてて
 ないけれど、
 色合が
 柔いこと、
 蓋
 とき
 〔一字〕ばん〔一字〕アキ
 すること
 ために、
 お氣にいり
 ひとつ
 なかには
 子安貝や、

それは
 コルク質
 木で、
 合せめ
 ごとに
 ついた
 あるが、
 はひつてた
 なにも
 とりたてて
 ないけれど、
 色合が
 柔いこと、
 蓋
 とき
 〔一字〕ばん〔一字〕アキ
 すること
 ために
 お氣にいり
 ひとつ
 なかには
 子安貝や、

榎の実や
 時
 遊び
 細々した
 一杯
 あるが
 其中に
 一つ
 珍らしい
 径
 位
 ついてゐる
 銀で
 分が厚く
 できてる
 故
 人さし指と拇指との間に
 持つて
 ちよつと
 折々
 中
 取出し

榎の実や
 時
 遊び
 細々した
 一杯
 あるが、
 其中に
 一つ
 珍らしい
 径
 位
 ついてゐる
 銀で
 分が厚く
 できてる
 故
 人さし指と拇指との間に
 持つて
 ちよつと
 折々
 中
 取出し

取出して、
 できてる

榎の実や、
 とき
 遊び
 こまこました
 いっぱい
 あるが、
 そのうちに
 ひとつ
 珍しい
 さしわたし
 ぐらゐ
 ついてゐる
 〔削除〕
 分あつに
 できてる
 ために、
 指で
 もつて
 ちよいと
 をりをり
 なか
 とりだして、

榎の実や、
 とき
 遊び
 こまこました
 いっぱい
 あるが、
 そのうちに
 ひとつ
 珍しい
 さしわたし
 ぐらゐ
 ついてゐる
 〔削除〕
 分あつに
 できてる
 ために、
 指で
 もつて
 ちよいと
 をりをり
 なか
 とりだして、

榎の実や、
 とき
 遊び
 こまこました
 いっぱい
 あるが、
 そのうちに
 ひとつ
 珍しい
 さしわたし
 ぐらゐ
 ついてゐる
 〔削除〕
 分あつに
 できてる
 ために、
 指で
 もつて
 ちよいと
 をりをり
 なか
 とりだし、

余程 <small>よほど</small> 小匙 <small>こじ</small> 此 <small>この</small> 眺めてゐる <small>ながめてゐる</small>
余程 小匙 此 眺めてゐる
よほど 小さな匙 この 眺めてゐる
よほど 小さな匙 この 眺めてゐる
よほど 小さな匙 この 眺めてゐる